

日刊 動労千葉

84. 7. 13

No. 1688

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五、六（公衆）〇四七二、二二七、二〇七

敗北主義を粉碎し総反撃を遂げよう

動労本部が40回全国大会の方針を弾劾する

動労「本部」第40回全国大会にあたり、『日刊動労千葉』は四号にわたって「方針」の反動性を暴露し弾劾してきました。

すなわち、自らの路線の破綻と組織的危機ゆえに「国鉄を守るために当局の奴隷となつて働こう」と称し「働こう運動」を一步進めた「労働強化」のうえに「労使会議」を要求するといふ「分割・民営化」「経営参加」「産報化」に道を開く路線であると同時に、自衛隊、安保を承認したうえで政府・自民党、国鉄当局と一体となつて動労千葉・国労破壊に国鉄労働運動破壊に生き残りをかけるといふとんでもない反階級的路線であります。

われわれは、日本労働運動の戦闘的拠点・国鉄労働運動を防衛し、中曽根の軍事大国化・改憲攻撃を阻止する拠点として強化するために、すべての国鉄労働者の力で動労「本部」革マルの追放、一掃・動労大改革を実現し、総反撃にうつてであることを呼びかけるものです。

完全に支配者の側に転向した 動労「本部」革マルの粉碎・一掃を

国鉄総裁・仁杉は、六月五日「一時帰休」「出向」「退職勧奨」を柱とする「余剰人員対策」を発表、六月二日には「分割・民営化」賛成発言を行うとともに、七月十日「余剰人員の調整策」なる大量首切り攻撃を提案してきました。

一九八二年七月の臨調答申をうけた国鉄当局は、「職場規律の確立」をはじめとするさまざまの攻撃を加えてきました。しかし、今回の「分割・民営化」賛成発言、「余剰人員解消策」の恐ろべき提案内容は、これまでの延長線上のものではなく、国鉄労働運動解体にむけ大量首切りに踏み込むという、明らかに一線を越えた凶暴な攻撃といわなければなりません。

そもそも八三年度の赤字一兆七千億円、九〇年度で三一兆円に達すると予測される長期債務というこの空前の「国鉄危機」は、「日本帝国主義の危機」そのものであり、中曽根打倒を根底にすえないう限り解決不可能であることをはっきりととらえて闘っていかねばなりません。

二年前、当局は何ひとつ自信も展望もないままに危機にかられて「職場規律」攻撃を開始しました。ところが「支配者の危機」を見ぬくことのできない動労「本部」革マルは「冬の時代だ」「闘うべきではない」と当局の尖兵となつて、率先協力することによつて当局の攻撃にはずみをつける役割を果たしたのです。

そして今大会では「国鉄を国鉄として維持するため」と称し、労働強化と労使会議を要求する企業防衛主義に転落したばかりか、今回の「余剰人員解消策」についても「当局が再建プログラムで話し合ってくれば認める」との態度表明を早々

おこない、大量生首切りの先棒をかついでいます。 「定員法」敗北を教訓化し、 三里塚！国鉄決戦勝利かちとろう

われわれは、一九四九年の「定員法」を許した痛恨の歴史を今こそ教訓化しなければなりません。すなわち「定員法」の布石ともなる一九四八年七月に出されたスト権・団交権を剥奪する「マッカーサー書簡」政令二〇一号」に対し、当時の労働運動指導部が屈服し抵抗できないうえに、一九四九年六月の「公労法」成立をめぐる組合内部の対立をも巧みについで、政府・支配階級は同年七月三日に「定員法」を強行提案し四日第一次三〇七〇〇人、十二日第二次六三〇〇〇人、十八日第三次五八八人の合計九五〇〇〇〇人の生首切りを強行していったのです。

政府・権力は労働運動指導部が何ひとつ首切り反対闘争を闘えないという状態を見すかすや、七月五日「下山事件」、十五日「三鷹事件」、八月十七日「松川事件」の謀略をしかけて、大弾圧による追い打ちをかけてきました。

われわれは、権力が国鉄労働運動をつぶすために、わずか一カ月余りのうちにこれだけの悪どい暴力的攻撃をかけてきたという事実を肝に銘じておく必要があります。

いま、「第二の定員法」ともいふべき大量の生首切り攻撃に直面するわれわれは、三五年前のこの敗北の教訓をしつかりととらえかえし、のりこえて全国鉄労働者が決起しなければなりません。

三里塚闘争に決起し、国鉄労働運動破壊攻撃を打ち砕く闘いが求められています。

政府・自民党・国鉄当局の手先きと化した動労「本部」革マルを一掃し、三万名の首切り粉碎、「分割・民営化」を阻止しようではありませんか。